
師匠とわたし

満月氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

師匠とわたし

【Zコード】

Z3040P

【作者名】

満月氷

【あらすじ】

とある天才魔法士の冷徹師匠と弟子である獣人なわたしの旅（？）。まあ、旅なんてそんなにしてませんし、私に雷撃ちすぎな師匠や、私には変態なお嬢様や、変態さんに好かれるわ……ツツコツビビンバが多すぎですっ！

(1)・1 師匠の面パーセンテージ

今日の宿は「レインドーラー侯爵様の密室」。たいてい私と師匠は野宿、もしくはどこかの宿で寝泊りだけど、ごくたまに師匠の名前を聞いて招待してくださるお貴族様もいる。

「それにしても素敵なお部屋ですねー、師匠」

師匠が私にだんまりなのはいつものことなので私は気にせず喋る。

「こんなに綺麗な部屋がたくさんあつたら眩しそぎて目が大変そう。お食事も食べきれなくて残しちゃったのはもったいなかつたなあ」

「そんなに気に入つたならいいで」「嫌ですよ」

師匠の言つことはいつも決まつてるので私は途中で遮つた。

「何度も言つても私は師匠について行きます。置いてかれたって絶対に追いかけますから」

師匠は何かと私を邪険にし、粗末に扱つ。

過去何度も置いてかれたことか。

でも私には獣人族特有の耳と鼻があるのだ。

師匠は足音をたてないけど私の耳は確實にその音をとらえる。
鼻だつてきく。

置き去りにされたつてどこまでも追いかけてついて行くと私は決めたのだ。

でも私はまだまだ未熟（子供ともいひ）で、集中しなければ師匠だけではなく普通の人の気配も感じることは出来ない。

「失礼致します、ギルバート様、リィブ様。湯浴みの用意が整いました」

ノック音の後に聞こえる若くて意志がある声。

・・・といふか食事の後にお風呂ひどいんだろう。普通、食前では？

まあ食事が先に出来たなら仕方ないけど。

「じゃあ私が・・・」

「・・・ちえー」

と、私に気を使つともなく師匠はさも当然のよひに先に進んだ。

師匠が先に入るなら待たなければならぬ。
別に気を使つてゐるわけじゃない。

前に師匠が入つてゐる間に私が別の場所でお風呂に浸かつていたら後

々で怒られた。

それも怒鳴るわけではなく無言で睨まれるからそういう怖い。

しかも雷撃たれましたよ。いや、冗談じゃなくて本当に。もちろん本気でやつたら私燃えカスになっちゃうから多少手加減はされてるんだろうけど、これは本当に痛すぎる、熱すぎる。シユウシユウといったよ。

「・・・誰が荷物を放れと言つた」

「う、うう・・・す、み・・・ま、せん・・・」

師匠の荷物はすごく少ない。

というか手ぶらに近く、持つのは軽く立たない、かつこいいポーチだけ。それも大人の片手くらいの大きさ。

なぜなら師匠の指輪の一つに、仕組みはよくわからないけど亞空間？らしきものがあり、その中に自分の荷物を収納している。

ただ、よく使うものだけはポーチに入れている。

だから、もしそれが盗まれるようなことがあれば非常に困るらしい。

・・・慌てふためく師匠は想像できないけど。

で、お風呂に入つてゐる間は外さなければならぬ。

だから私にちゃんとみてろといつて怒つてゐるのだろう。幸いポーチは無事だつた。

それ以来、私は師匠がお風呂からあがるまで一人荷物番だ。
・・・多分、さぼつてもばれそつだし。

「・・・・・、早くお風呂、入りたい」

もう四日も入ってない。

泥どろか汗臭いし、血漫の血へ長い髪もぱさぱさ。服だって洗いたい。

師匠早く戻つてこないかな。

(一)・メイドが早さが命

「ンンン」と軽く控えめなノック音。

師匠はまずありえないから最初から可能性の中から打ち消している。

「何か、」ようですか？」

「失礼いたします。侯爵様からの」所望でようしければ私の部屋でお話をしたいとのことなのですが・・・」

「マジでやつは違つメイドさんの声がする。」

「あ、でも今師匠にませんので・・・」

「でしたらリィブ様だけでも」

「で、でも、荷物を見てないと・・・」

「でしたら誰かを見張りにつかせますので」

「だ、駄目です！私が師匠に怒られちゃいますからーそ、それに汚れますからー」

「・・・わかりました。では少々お待ちいただけますか」

と、急にドアの向こうから声がしなくなってしまった。
由櫻の犬耳に意識を集中させて廊下の音を聞いてみた。

・・・足音が早く遠ざかっている。

あの様子だと主人に聞きに行つたのかもしれない。

「・・・行つたら、確実に怒られる」

師匠は休むときはしっかり休む人だから多分30分以上は戻らない
だろう。

もし戻ってきたとき、私が居ないのを師匠が見たら・・・・・・

・・・「わいつ！遠くからでも雷が絶対くるっ！

私がもんもんと悩んでいたら本田3回田のノック音。
さつきのメイドさんだった。
さすがメイドさんは早い。

「公爵様が、汚れは気にしないのによろしけば私がリィブ様方のお
部屋を訪問しても、とのことなのですが

・・・あやしい。

びつしてそこまでして会いたがるんだろう。

師匠曰当てだとしても今は私しか居ないと云々ている時点で諦めて
いるはず。

・・・でもまたとえ私が居なくても何も起らぬいよね。またか私の田の前で師匠の荷物を盗むわけじゃあるまいし。

・・・とこ'うかそんな度胸あるのかな?

たとえそうだとしてもそんなことさせないけどね。

こっちだって荷物守ることにいろんな意味で命懸けてるんだから。時計を見ると師匠が戻るまでだいたい20分くらい。

「・・・師匠が戻るまでの少しな」

・・・師匠が途中で帰つてきたら、びひつよひ・・・。

(1)・3 侯爵様はわかつてらつしゃらなし

「失礼しますよ」

そう言つて入つてきたのは人生の半分を過ぎたような顔をした侯爵様。

ええ、本当に失礼ですね、わざわざ師匠のいなこときに来るなんて。後で被害来るの私なんだから。

「侯爵様、手短にお願いします」

「わかつてますぞ。しかしそんなに急かさんでも・・・」

あ、あなたは何にもわかつてないからそんなこと言ふるんです！

「お話とは？」

「実は、話しどうより相談なんだが・・・」

ただお喋りに来たんじゃないのは勘だけどわかつていた。

といふが今までに行つた家の偉い人、ほとんどの人が同じよつて呼び出してみんな同じ相談事言つてるし。

「まず第一にギルバート殿を私のもとで雇いたいのだが

やつぱりね。

しかも第一つて、複数あるの？

「まず、無理ですね。師匠はひとつの場合にいるの嫌いなんです」

「どうしてもかの？」

「ダメです。多分縛り付けても、脅しても効果はないです。…。
そのかわり、報復が、きますけど」

師匠いわく「正当な罰」を思い出し、何故か私が冷や汗。

「そうか…。では次に、」

あれ？ やけにあつさり引き下がった。

それが本命じゃないのかな。

「ギルバート殿の魔法具を高値で買い取りた「無理です。」

侯爵様は叫びだした私にびっくりしていたがそんなことどうでもいい。

あ、あなたはなんのために私がここで一人残っていると思つているんですか！

塵一つ盗まれないよう見張つてるんですよ…つまり師匠が他者にあげるものはないんです…そして、それを私に言われても困ります！

「…これも駄目かの？」

「ダメです、無理です。どちらかといえどさつきの質問よりもこの確率が大きく、ゼロに近いです」

私の連續ダメだし攻撃にさすがの侯爵様も少し機嫌が良くなくなる。

「…じゃあ第三に」

まだあるのですか。

「獣人であるリィブ殿を買い取りたいのだが」

興味の矛先が急にかわりましたね。
といふが今までにない質問だつたから困惑つよ。

「…あ、え、えつと、師匠は、ダメ、とは言いませ

んね。むじゅう売ると思こます」

「では」「でも」

「でも、私は師匠について行くと決めてるんです。拾われた時に、ちゃんと成人するまでにはついてくんだと。・・・絶対に。だから、ごめんなさい。私を買っても脱走するし噛み付くわあんまし意味ないです」

侯爵様は落胆したようで顔を伏せてしまつた。

・・・さて、ここで今までのお偉い人は三択に分かれます。

そのいち、商談を諦めて部屋に戻るか、せめてものお詫びとして豪勢なものを振舞つてくれる

これが一番ありがたいな。

その二、諦めたかのように見せかけて腹いせに陰から迫る。いわば闇討ち

これはまあ私でも殺氣といつ氣配でわかるから別に何でもない。

問題はみつづめ。

師匠はともかく私にとつて一番厄介なタイプ

これはやめてほしい。

「…ふむう、そうですか。あなたが脱走するのではしかたがありませんなあ」

よかつた、わかってくれたのか…な?

あ、あれ? なんで侯爵様にじりよつて来てるんですか?

「残念ですね…。」
「…なければならぬなんて」

悪い予感大当たり。

…この家結構住み心地よかつたのにな。

師匠戻り時間まで残り5分もなかつた。

(1)・4 したくもない蛇観察日

「……え、えへっど……ですねえ……」

「何ですか？」

ダメだ。絶対に言つこと聞いてくれなさそう。

きっとこの人も私と同類か。

かは罰が小さい……………はず。

「食つて骨にして磨いて売り出してくれるわ小娘が一つ！」

こまかつ！

確かに私みたいな獣人は貴重だから骨でも高値で売れるかもしけないけど、なつてたまるか！

「半人合にも色々いるけど、侯爵様は完全変異なタイプなのかな？」
私はすでに半分変化の完全形体無しの半獣だし。それにしても侯爵様大きいなー。」

「どうかでかいよ！さつきまで私と師匠の間くらいの身長だったのに、なんでこの広い部屋の半分くらいになるの！？」

「えいっ！」

完全に大きな蛇に形を変えた侯爵様から逃げるために、私は師匠を真似て作った出来損ないの玉を侯爵様の足元に投げつけた。名付けて、『アカアカはくしょん』！…これ、師匠に話したら、睨まれました。

玉の中からでた大量すぎる赤い粉が部屋中に充満しくしゃみが止まらない…………と思う。

あまりにも吸いすぎると死に至る…………はず。
人間にはひとたまりもない…………よつに作ったはずなんだけど自信はこれっぽっちもない。

「きかんつ！」

ですよねー。自信ない上に相手、蛇だし。

蛇つてくしゃみするのかな？

「…」

それにして侯爵様をつきからありがちなセリフばっかりだな。
でも幸いなことに、くしゃみはしなくても出ばなをくじいた大量の赤い粉は侯爵様の視界を…

「…あれ？」

これひょっとして、私もやばくない？

私、まだ吸つてないけど獣人つて一応人でもあるから…。

「ちょっと、やばい！」

なんというバカなんだ私は！

師匠の荷物は持つたから、薄め涙目の侯爵様より早くドアに行かなきや！

「おのれえ、小癪な！」

大丈夫、ありがちな人なんかより断然間に合つ！
……つて、ええ！？ドアが勝手に開いた！

……ま、さか……！

「失礼致します、侯爵様」

な、なんだ、さつきのメイドさんか…。師匠かと思つて心臓が止まりそうになつたよ…。

騒ぎに気づいて見に来たのかな？

いや、でも蛇になつた侯爵様に驚かないし、この人の手馴れた感じを見ると侯爵様の正体や真意を知つていたのか…。
あと、侯爵様、つてことは私に用はないのかな？

ナイスタイミングー！隙をみて逃げよう！
とりあえず一安心

「…………

じゃなかつた、全然まつたく。

「ギルバート様をお連れいたしました」

バッドタイミングー！なぜ今この瞬間！？

師匠の観点だと多分こんな感じ……。

侯爵様。

召使はこの爬虫類を侯爵様といったのだからそうなのだろう。
だがなぜ自分の部屋にいるのか。
わたし。

荷物を守れといわれたのに田の前で狙われていたかのような
失態。
しかも今かなり安心顔をしていたがよもや自分を巻き込もう
としているのでは。

召使。

蛇を見ても驚かず自身の仕事をまつとつじょりとしている。
関係者疑惑。

室内。

自分が見慣れた赤い粉が辺りをただよい、それは風呂上りの
自身に降りかかる。

…そして、師匠は……。

バチ

…師匠の、足元から、電気、が……。

終わ、つた……。

しかも、私も同罪のつもりですか師匠！？
どんどんそれは、音は、数は、増えていく。

師匠、私はあなたに絶対についていくと心に誓っています。ですが、

今だけは逃げさせていただきます。

…師匠はまず先に、私を狙つてきそうですから。

(1)・5 皆々様による大運動会？

きやーーー！

……そんな可愛らしいものじゃ済まされないよ、この状況。もう呆れと疲れと恐怖が合わさって何も言えない。

私、走ります。もう疲れた。

師匠、走ります。見た目疲れてないのが怖い。

侯爵様、走ります。目をぎらつかせて疲れ果てているように見えるのは歳のせい？

メイドさん、走ります。大きな足音を立てずに、顔は静かに。というか他の人はともかく、よく私について来れますね。

……私以外は誰かしらを何かしら考えて追いかけてます。つまり私が先頭。

いくら師匠でも本気を出した私の獸の足には勝てませんよね！…そうであれ！

「待たんかーーーっ！」

「…………」

「お待ちください侯爵様。はしたないです」

皆が敵。しかも私は誰に捕まっても終わりというかなり過酷になつてゐる…。

ちなみに、私>侯爵様>師匠>メイドさん、になつて走つてゐる。侯爵様は多分わかってるんだろうな…、師匠相手に勝てるわけ

がないことを。だから私に狙いを定めてわざからあえて後ろを見ないのはそのためかも。

メイドさんはメイドらしく『蛇で歩き回るな』と言いたいんだろうな…。でも今戻つてぎりぐり腰にならないかな?

師匠が誰をターゲットにしてるかなんて言つまでもない。…だ、だつて、後ろの一人はともかく前方の一匹を、視界に入れないことが、ありありとわかるから…。

すみません!すみません!

勝手に調合品使って「めんなさい」。そり製法を盗み見て「めんなさい!

「師匠の魔法具にこいつをちゅうぴり触れたこと謝りますから!」

チユードーーンッ!

雷がーーーすぐ後ろで落雷が発生したー血煙の長い髪の先が焦げちゃいましたよー!
止まつたら、確実に殺される……!
とととりあえず師匠の見えないとここまで加速つーどいかに隠れないと…。

「…お待ちくださいと申しますのでおつまますの!」

あれ?なんか、声質が、変わつてません?見るのでしる恐ろしき師匠の後ろをゆづくつと睨みると……なんか毒々しいピンクの巨大蛇がいた。

気持ち悪つ!

何あれ、とか、増えてる、とか、あれメイドさんだよね、とか、思うよりも色がまづ気持ち悪い。

想像してみてください……。蛇の頭から尻尾の先までにいくつもの薄いピンクの筋やところどころに赤の鱗、田は濃いピンクなどなど……。彩り気持ち悪すぎる……。

しかも侯爵様よりではないけど、そこそこでかい。

「ハハ……」

しまつた……よたつにむかひつた!

チユド——ンツツ……

… そのまま走っていたら私がいたであろうといひて、降ってきた。
… 何が、とは聞かないで…。

「… 楽に、逝かせてやる」

逝かす！？ 師匠手加減してますよね！… そうですよねっ！？
気づけば屋敷にいるであろう後者熊の召使達がおののおの独特な、個
性的な、ぶっちゃけ気持ち悪い爬虫類姿で師匠の後ろにいた…。
何この追いかけっこは。

(1)・5 皆々様による大運動会? (後書き)

リィブの髪はふくらはぎまでの長さです。

(1)・6 メモリ/データ(前書き)

なんか私の思つていたよりも話が進むので
一応不定期連載を取り消します。
なりそうな時はお知らせしますので。

(一)・6 ハヤコニア

……もう、行つた……？……………行つたよな、うん。
よつやへ、よつやへ、よつやへーー師匠をまいた！

何ですかあなた様はーお歳のせいで弱つた侯爵様やメイドさんもと
い爬虫類さんたちを避けたのはいいけど、私が部屋に隠れようとす
ると距離を離したはずの師匠がすぐに入つてくるし、衣裳部屋に隠
れれば一列一列雷で一気に確認しようとするしー

おかげでこの家の侯爵様やその奥様らしき服、ほとんど燃えぢやつ
たぢやないですか！

普段けち臭いのにこいつときだけ容赦ない。

……これはそうと、怒つてゐる。

ちなみに今私は書庫に入つて手前のテーブルクロスの下に隠れてる。
クロスをひいてるし本が積み重なつてゐるから傍目からは見えないし、
さすがの師匠も貴重な資料や未発見な書物があるかもしれないこの
場に落雷はできないうだろうといつのが私の勝手な考え。
にしても師匠、本当にしつこかつたなあ……………なんで？

いくらなんでもあんなには…

「……………はつーあつ、……………くあー……………」

危つて大声を出しそうになつたから危ない危ない。
では氣を取り直して心の声で、せーの、

あーーーつ！！師匠のポーチ持つたままだつたーーーつ！！
これじゃ盗んだも同然じゃないかー！だから師匠はあんなにも……！

「…………。」おお逃げ回つてもうちが明かな
いし、その前に師匠が完璧にぶつけしる。

いし、その前に師匠が完璧にぶちキレる。

だからといって素直に渡しに行つても、獵師の目の前を黙か歩くのと同じこと。何か言う前に……うん、問答無用、か……。

あ！ホーチだけ師匠の見える場所に…………ダメだ、私がほとほとが冷めてから姿を現しても師匠は同じことしかしないだらうな。何にしても私には地獄しか残されていないのね……。

「……もう、いやだ……、お風呂入りたい」

泥臭いし、汗臭いし、粉っぽいし、焦げ臭いし……。一部は私が原因
だけどな。

獣人として荒っぽいことには慣れてるから数日間お風呂に入らないのはどうってことないけど、…………これは、さすがに、汚すぎる。

キイツ

.....?今何か扉が開くような音が.....。あ、この部屋でないから心配ナツシーネングだよ。

多分この音は、……玄関、かな？

どうしようか。見に行く? 気にしない? 師匠の地獄? 爬虫類の地獄?
? あ、『爬虫類の地獄』必然的に師匠の地獄』になるからどちらに
しても地獄か。

早く行かないとい謎の顔の正体は闇の中だしなあ……。

よしつー やめようー

普通は『いじめっと』『あの音は何なんだ?』とか『いじめちゃいやら
れない!』とか『危険だけど氣になる!』とか思つ場面なんだらつ
けど、私はそう思つ前に思考に危険信号がかかる。
何でつたつて、…………今この時、好奇心よりも勝るもののがた
くさんあるから。

でも私はその時、耳を疎かにしていたので氣づいていなかつた。
『那人』がこちらに近づいていいる時点でどうりこしても師匠の地
獄に繋がつてしまつことに。

（1）・フヤンテレは美少女

かなり気になるけど、これは我慢我慢我慢……

力チヤツ

つ！ 誰か、きた！

スツ-----スツ-----スツ-----

この衣擦れ、だれ？

師匠は無音だし、侯爵様やメイドさんたちは蛇のはず。人間に戻つてたとしてもこんな大人しい音じやないはズドシャアアアツ！！

えつ？

「…………氣配が、する…………」

え、え、え、え、
！？
……………、つー？何がどうなったの

机の中に隠れてるけど気配消すのは結構得意です。この女人らしき声は初めて聞いた。

……今、田の前におどりおどりしい黒い剣が突き刺さっています、机を突き抜けて。

つまり、……狙われた？ 明らかな、敵意？

「……………」 いのちしゃるんでしょう…？ 怖がらないで、出できてください……。怒つて、ませんから」

怖い、怖いよーーー！ 師匠と回じへりーーー！

はつー嫌な気配！ ！

「えいっー！」

机を蹴り上げると同時にバックステップすると、さつさよつもリアルな音が近くで聞こえた。

危つく、頭から串刺しになるところだつた……つー！

師匠の親戚つて言われても納得しそうなほどの潔い行動。

「……………あう？…まちがえちゃつたつ」

ひーとーちーがーいー！ ！

そんなテヘつて顔するなーーー！ 茶田つ氣を入れたつて無駄ー！ 反省の色が全く見えないーーー！ ！

「やるにしてもちゃんと確認してからにしてください...」

いやこれもどうだらう、わたし。

「「めんなさあい...。怒りのあまり、つい...」

やっぱ結局怒つてたんじゃん。

私を殺しかけた人は気のいい穏やかな口調をする.....八歳くらいの女の子。かなり大人びてるなあ...。

剣を突き刺すときこの子はどんな顔をしてたんだろう。これでその物騒なものを持ってなければ誰もが恋しそうな女の子なのに。ただ、口調からなんとなくため口がはばかられるようなオーラがする...。

「まつたく...で、何してたんですか?」

「実はここにねえ、私の好きな人がいるから捜しているの。恋人でね、心も体もすごく素敵な人...」

武器を持つたまま目はハートがとんでる。

...この子、危ない人だあ...。

だつて私を殺そうとしたもん。勘違いだつたけど好きな人に完全な殺意があつたもん。

といふかわけわかんない。好きな人なんでしょ！？何で殺しにまで行くの？それほどの怒りつて...。

「でも、何でもその人の周りに雌豚がいるみたいなの。…あ、豚に失礼ね。彼のまわりに『『ミ』』があるみたいだから排除しようと思つて今日はこいつそり、ね。ふふつ」

「笑い事じやありませんから、それ。いくらなんでも女性殺しは…」

「え?…………あつ、ち、ちがうのよ。女の子を殺すなんてそんな残忍な…。普通にお家に帰そとと思って来ただけよー…これは…逃げるあの人を地面にとめるための、ただの道具」

道具にしては危なすぎます。

『『じゃないよ』』『『じゃ。』』

「心配しなくともあの人はこれだけで死んだりしないわ。…………でも、あの人を殺してしまえばずっと私のモノに…。ふふ、冗談よ。私があの人を殺すわけないじゃない」

「この人ヤンデレだあーーー！」

だから可愛く言つたつてダメです！

あなたが言つと『冗談に聞こえないんですよーーー！』

(一)・8 感をおれいれ言つてはこなかせん(前編)

あとがきのせうぢかよつとめんじくれこじと書ひてゐるので
嫌な方はとゞしていいです(汗)

(1)・8歳をあれこれ言つてはいけません

「そつといえは相手はどんな人なんですか？」

相手が大人びているのだから子ども扱いは厳禁だと思い、普通に接することにした。

「さつきも言つたけどとても素敵な人よ。幼なじみでね、結婚の約束もしてるの。すっごく優しくて……、……残念なところは、ちょっとわがままなところかしら。あ、次の突き当たりに三匹いるわ」

「じゃああつちから行きましょうか」

優しい……、相手が師匠かもという可能性はこれで消えた。じゃあ侯爵様の息子とか？

侯爵様見た目高齢だからいそう。

とりあえず私はこの子と行動することにした。万が一師匠に見つかっても何とかしてくれそうだし。

この子見た目は子供なのに、剣を軽々と持つたり、耳や鼻が私よりもすぐかつたりした。

……何となく自信喪失しました。だつてこれが『彼を追いかけるための修業の結果』なんだよ！？

ヤンデレに、年下に、負けた！しかも彼女の修業目的『彼を追いかける』が私となんか似てるし……！

「…ところで、私聞いてなかつたけど、あなたは、まさか、あの人
にねえ…？」

「ないです、むりです、ありえません、却下。さつきも長々と話
ましたように、私はそんな人に付き合つてゐる暇ありませんから…」

「確かにお師匠さんについていくんだつたわよね。…そうよねえ、あ
なたはあの人の方にはなりそうもないわよねえ。あなた結構若いし、
汚いし」

さりげなくひどい。しかもあなたのほうが若いですから。

私人間年齢で14歳だけどあなたは8歳前後でしょ？

「…歳はあなたに言われたくありませんよ」

「……？…あ、ああ。言い忘れてたわ～。私はこれでも三十路よ？
姿を変えてるの～！」

大人びてるのではなく大人だつたのか！
その口調もおばさんだから？
…口にしただけで、殺されそうだ……。

「あなたも聞いたことがあるでしょうけど、魔法具の中には見た目
を変えるものがあるのよ。といつてもただの幻覚で本当に若返つ
てるわけではないのだけれど。今の私は八歳のころの私。この方が

行動しやすいのよねえ

確かに。

剣さえなければ見た目はただのか弱くかわいらしい美少女。だが、その実態は彼のためにと心も体も鍛え上げられたヤンデレおばはん。

「…何か失礼なこと、考えてない？」

「いえいえいえいえ！ 何も何も何も！！」

(1)・8歳をあれ!」れ言つてはいけません(後書き)

この世界は、「普通の生き物」か「人と生き物のハーフの『獣人』」しかいません。

つまりただの人間はいりません。

寿命は人間と同じで産まれた子どももみんな獣人です。

〈半A+半B 半A○・半B〉

獣人たちも、変化してからなる『変化タイプ』と、
見た目からすでに人間にも生き物にもみえる『混ざりタイプ』がい
ます。

めんどくさくて本当にすみません!

(1)・9 乙女(?)に不可能はない

「ところで私は獣人ですか？あなたは半人ですか？えつと…」

「あらあ、まだ名乗つてなかつたわねえ。うーん……………じゃあ、とりあえず、『謎のビューティフルフロッシングちゃん』とでも呼んでね！」

あなた本当に三十路ですか？

しかもたつたこれだけでこの人の正体がわかつてしまつたよ。この姿が子供の頃つていつてたから半人なのは間違いないんだと思うけど。

といつかなんでこの屋敷爬虫類とか両生類ばつかなんだ。

「じゃあ略して『謎のビーフちゃん』で」

「…あなた、一言余計つて、よく言われないかしらあ…？」

きあー！すいません…！

その手のモノ抜かないでーーー！

あまり大きな声で言えないから、田で訴えるしかないですよーでもどうやら伝わつたらしい。

「…はあ……。それで呼ばないんなら、許してあげる……」

「…その、本当に、」

「つ！！ストップッ！！」

「ススメ！」

「…………」久の感覚、なあ……」

「みつけたわあ！！私の愛しい人ー！！今、今行くわねえ！」

あ、走つて行つりやつた……………つて早アツ！

…でも、目がどこか危なげで黒の剣をザリザリ引きずつてよだれを

少し垂らしながら速く走り迫つてくるのを、前方から見た者からしたらどんな気持ちだろ？…？

いくら爬虫類でも怖いものはこわいだろ。

でも顔は女子らしく上気していて、声は怖いけどどこか愛に満ちてゐる。

よっぽど好きなんですね…。でも、制裁はやめないんですね？

「邪魔アツー！」

あ、逃げてた一人のメイドさん（？）が跳ね飛ばされた。

(1)・10 秘密の会話

「侯爵様、大丈夫ですか？」

「げほつ……う……あの小娘、なにをう涙が……」

「

「だ、いじょうぶですっ。医者の私が、しつかり体の隅々まで治してあげますから。さあ早く蛇でも老人でもない姿に戻つてください。そして……十歳の頃の侯爵様が、みたいなあ～っ」

「！」シヨタコンめ……。俺に対して、それは、失礼では……

「だつて侯爵様の本体はもうおっさんなんだもの。そんなことよりその魔法具で早き若かりし頃を見せてください！前こつそり盗み見た昔の侯爵様のお「真がもう可愛すぎるのなんの！」それ以降私は侯爵様をそういう目で見てきましたあ～」

「……！」のぞ変態め、何を勝手に……。後で、覚えていろ……。

「もちろん少年侯爵様を見たなら忘れられませんよー。中身親父でも見た目が美少年ならもうかなり萌えますからー悶えます！偉そうな少年カモンー！」

むしろストライク！！！

「ハーアー……ハーアー……。そしたら、そしたらあ……あ、あんなあ……こんなあ……！」

「うわっ……は、鼻血をとめる！」

「ああ、いけません侯爵様！先程の老人みたいな口ぶりをしてください！あの少女を騙すためにと使っていたとき、私はあれが十歳であればと想像するだけでもう、もう……抑えるのが大変でした！」

「どうでもいいから早く薬をうつて……ぐ……早くあの小娘を……」

「侯爵様が姿を私好みに変えてくださるのなら、いいでしょう……でも、なぜ人にもどうないのでですか？どうやらこじしてもやりづらいです」

「…………もとに戻つたら、どうするつもりだ？」

「変化するまで手術室でかんき」「黙れッ！」

「……まあ、それは冗談ですので置いといて、前々から聞きたかったんですけど、侯爵様はなぜの方から距離を置いてるんですか？二人しかいないこの時だからこそ知りたいんですけど」

「……っ！」

「の方は侯爵様を束縛なんてしませんし、私と違つて白状でもありません。の方はあなたに心から愛してもらうために一切わがままはいいません。大人になつても純粹で正直でおちゃめで可愛くて考えが真つすぐすぎるくらいです。その証拠に、あなたと一緒にいたい、といつ思いだけであそこまで強くなりました」

「……」

「…本当は好きなくせに」

「…違つ……っ！」

「たとえあなた方が本当に怖くてもあなたが浮気をしなければいいだけじゃないですか。何も彼女はあなたが他の子と話しただけで襲いかかるわけじゃないんですし。彼女は浮気以外では他では勿体ないほど心が寛大ですよ。あなた自身だけを本当に愛していますから」

「…私は彼女の制裁だけは心の底から恐ろしいんだ」

「…あいつとかあの野郎とか言わないあたり、やっぱり好きなんじやないですか。それに制裁以外はどうおもつてるんですか?」

۱۰۰

「それでよく何年も婚約者なんてしてますね。の方が何も言わな
いからって。情けない…」

11

1

「…………はあ。…………かけちやいました。それで、侯爵様、そろそろいい加減もとこもどりてください」

「ああ、ああ

「ううでこやつをこなすことを、ううせんせー

「…わかつた」

「まあ魔法具で十歳だ」

「わから……待てっ！ なんで馬乗りになつてゐる。注射だけのはずだぞ！ ！」

「ああ……私好みの運命の美少年を私が押し倒してゐる……！」

「俺は今老いた蛇なのがじが美少年なんだつ……！ 運命でもなんでもない！」

「この時、『謎のビーフちゃん』によつて勢いよく扉が蹴破られたのは、彼にとつて幸か不幸か……。」

(1)・1-1 蛇に睨まれた蛙……え、逆?

「……なあに、してるのかしらあねえ…………？」

「…………」

ザ・修羅場つてやつなんだろ?よくわかんないけど。

急いで追い付いた私だけど、…………何、やつてんだろ?…………本当に。なぜか半壊してるドアの向こうには、蛇姿の侯爵様の上に鼻血垂らしてゐる白衣の女性が座つてゐる。

座つてるんだけど、…………私的には暴れる蛇を押さへ込んでるやつにしか見えない。

多分これが普通の反応だと思つ。他の人もきっと同じことこうと思うから私がおかしいわけではない。

「…………それは、浮氣と、みなして、いいかしらあ…………？」

やつぱりこれつてそういう状況なの!?

『謎のビーフちゃん』の背後のすゞいオーラからまさか、まさかね、まさかな、とは思つてたけど。

何と言つうか……どす黒いのオーラの一言だね。

私後ろだから見えないけどきつといい笑顔なんだろ?な……。

可哀相に……侯爵様固まつてゐる。

女医さんみたいな人は『あらら』といつて、悪びれた感じはしない。

呆気に取られてる。

とこうことはやつぱこの人の想い入つて……。

「あの女の人があなたの恋人？」

侯爵様明らかにおじさんだし、「三十路は若い子が好物なんだ」「人生色んな恋愛がある」って師匠の友達がいつてた。嘘か本当かわからんないけど。

「…………」めんねえ。天然でおバカさんでこんなときに変なこというダメダメさんを相手にしてる余裕が今ないの……

……素直に「そんなわけねえだろ馬鹿が」って言つてくれていいのに……

じゃあ相手は侯爵様か。…………おじさん趣味？

いやでもこの人は魔法具で三十路から幼女になつてんだから、侯爵様も変化してる可能性があるか。さつき言つてたけど、確かに蛇なら種類によつては尻尾にさすだけで死ぬことはないのかもしれない。

……刺しまくつていいわけではないだろうけど。

「…………もう、いいわ……」

「…………え…………」

「あなたは昔からそうね……。私に優しくしてくれるのに私がそれに力強く答えようとするといつも逃げるんだわ……。だからもうやめるわ……」

……その原因は力強くが強すぎるせいです。

『ビーフ』ちゃんはちょっとしょげてる。ちょっと可哀相。ヤンデレは危ないけど愛の塊だからね。

……でも前から見る勇気は私にはまだない。

……あなたは、これしきで諦めるんですか？

私は師匠についてきますよ。たとえあの人人が嫌がつても。私を売つても。私に危害を加えても。どちらにしても私は一人ぼっちなんだから、あの人についていくんです。

『謎のビーフ』ちゃん。

あなたはそれだけで恋を諦めるんですか。何年かかったのかは知らないけどここまできてやめるんですか。

「」今まできたのにあなたはそれを捨てて今の想い以上の恋愛がこれ

からの未来にできるんですか！？

女は根性ですよ！？私も根性で師匠から生き抜いてきたんですからー。それに一度恋したのなら、それが長ければ長いのなら途中で投げ出すのは大損です！！

……そう、言えればいいんだけど今の私は完璧に部外者。

私が口だしすることじゃない。

これは本人が気付かないといけないことだからすつしょくすつしょく歯がゆい！。

「…………なにも、そつは、言つてないだらうが……」

「…………？」

「確かに逃げてることは認めるが…………その、き、嫌いとは言つてないだらうが！……こ、これからも追い続けるがいいさーた、ただし、危なくないやり方で、だ！」

よく言つた侯爵様ーつ！

あなたが言わないと意味がなかつたんですね！偉いつ！
しかも微妙にツンデレっぽいですね！

「おー、侯爵様がついに言つた～」

女医さんも喜んでるよ。

「あ、一応言つときますけど浮気中じやあつませんからね。そういう誤解せずに。私十二歳以上の男は範囲外ですから」

……後半は、聞かなかつたことにじみつけ。

(1) 12 終わりよければ全て、……………良くない！

さして『謎のビーフちゃん』。侯爵様の告白に反応せよ。

「
一
の
？
」

二二二

「嬉しいわあ…………あなたがそう思つてくれてたなんて…………。しかし私が宣言したあとになんてね…………」

「お前、俺を諦めるような宣言を

「私はただいつものやり方をやめようという意志表示をしようとしただけよお？ちなみに詳しく述べれば本当はあのあと「だつたら強行手段として『布団の上』で言いなりにさせるだけだわ」と言おうとしたのだけれど。ふふ……私がこれしきのことであなたを諦めるとでも思つていたのですか？」

ଶାନ୍ତିକାଳେ ପାତ୍ର ଶାନ୍ତି

それにしても嬉しいような悲しいような

「あなたから本心を聞けて私はごくうれしいわー… では、さつそく

! . . .

「何を恥ずかしがっているの?ふふ……これからは恥ずかしいといつ感情さえ忘れさせてあげる……」

完全にやばいほひこいつでありますね。
でも助けないのは、あるこみハッペーHondな展開だし、私も命は惜しいし。

「はっ、恥ずかしいわけでは……」

「ああ、こじりじゃだめね。人が多すぎるのは、もう危険だわ
ねえ」

?最後の一體どうじつ意味だらうか。

「とにかく行きましょうか、…………あ・な・たーきやーーー!」

照れながらも蛇姿の侯爵様の尻尾を、握力どのくらいですか?つて
ぐらいにかなりこぎりしめる小さな少女。

もう片方の手で黒の剣を引きずつてゐるんだから、一見何ものかわからないですから。
でもどうやら帰るみたい。

「『ルーフちやん』」

「…それで呼ぶなと言つたはずよお？あなたは、天然のかしらあ…？わざとなのかしらねえ…？」

「… そうは言つてゐるのに剣を向けよつとはしないのは、たぶんそれほど怒つてはいないのかも。」

今はハッピーハンドタイムだしね。

「じゃあ、私達はもう行くわねえ…………… 愛の巣へつー！」

ちなみにさつきから侯爵様が静かなのはあまりに強く尻尾を掴んだために失心中。

掴みすぎですー！愛の巣に着くまでに天国に着いちゃいますよー！

と、いつ忠告も言えずに部屋の大きな窓から飛び降りていった。

今出るときには侯爵様が窓枠におもいつきりガンガンぶつかつてましたけど本当に愛してるんですね？

窓からじゃなく入つて来たときみたいに玄関からでればいいのに。というか夜中なのに今家に帰るんですか？

それにここ二階なんですけど。

着地できるであらうあなたはともかく侯爵様はどんどん危なくなつてますよさつとー。

疑問府だらけだつ！

「あ、言つ忘れてたけど」

ぎやあ！ いきなり窓から現れないでください！

狼の私でもぎりぎりなのに、どういう身体能力してるんですか！？

普通の蛙はそこまで飛ひませんが、

「あなたも早く逃げたほうが多いわよ。他の子達はもう屋敷の外に逃げてるからあ。……ではねえ~」

あれ? そういえば女医さんがいなくなってる。
さつさまでせわしく聞いてた他の蛇の声や音もないし。

バチリツ

.....

.....

振り返りつつとも振り返れないのは私の頭を締め付ける後ろの手のせい。

卷之三

「…………」

「…………」

「…………」

「…………焼き、加減……は…………？」

「…………考えてるとおりだ」

その夜雲一つない空に、突如自然発生した雲。そこからその年一番の大きな落雷が降りました。

結局私はお風呂に入れないまま、またしばらく旅をしなければならなくなつた。

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集（前書き）

さりげなく（？）人物紹介

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集

・・・あるバーでの三人集

「おい、聞いたか。あのギルバー＝ト殿が港付近に来るらしいぞ」

「あの最強最悪の暗黒魔法士がか！？」

「あれは敵ならば最悪すぎるが味方にすれば最強だからね」

「料金も最強最悪だがな」

「ともかくこいつに引き寄せる作戦を立てなければ」

「そこでここにわかるかぎりで彼のプロフィールを書いてみた

「本当か！？」

「貴様つ、俺らに黙つて勝手にやつていたな！？」

「じゃあ見ないの？」

「馬鹿か貴様は」

ギルバート（苗字・年齢・種別共に不詳）

『変化タイプ』

通称「最強最悪の最低暗黒魔法士」

長身で青みがかかった黒の髪に鋭い目が特徴。

彼の名を貴族の間で知らぬ者は少なく、誰もがギルバートに様々な依頼をする。

ギルバートは誰かの下につくのも縛られるのも嫌うが、仕事の場合は別で依頼料は絶対に高額。

だが多額であればあるほど、綺麗に仕事をこなす。

口数が少なく冷淡で容赦ないが魔法に関しては若くして凄腕で敏腕。さらに見た目もクールでカッコイイということでどの婦人、淑女からも人気。

起きてるときも寝てるときも常に隙をみせず、奇襲にあつた際には自身が強いにも関わらず供の少女を犠牲にする。

少女を疎んでいる節はあるが、詳細はやはり不明。
出身地、親、生い立ちも不明。

「まさこ（最強・最低・最悪）だな」

「不明不詳ばかりではないか。しかも知ってる情報ばかりであるで

役に立たんな

「当たり前じゃないか。僕が出来ることなんてたかがしれでる」

「そりに役立たずだな」

「…………じゃあこの情報もいらない」と

「何だよそれ？」

「『じうせまたくだらぬ』『あの少女についてまとめたものなんだけ
ど』『早く見せぬかっ！』

「…」

「貸しだよ？」

リライブ（拾い子のため苗字はなし）、14歳、種別は狼『混ざ
りタイプ』

常に敬語で喋り、ギルバートとは反対に真っ白に長い髪に犬耳、犬
の尾が特徴。

狼の獣人は今や少なく貴重である

狼特有の耳と鼻が自慢らしいがまだまだ経験不足。

彼女自身は一人でいるとただの狼娘だが、ギルバートのそばでよく

よく田撃されているため、

ある男は「あの娘には何か秘密があるんじゃないか？」

ある娘は「あの犬を私のペットにしたいわ」

ある老人は「ギルバート殿の教え子に違いない。将来きっと有望になるだろう！」

ある婦人は「ギルバート様のおそばをうろちょろと！なんて卑しい犬なの！？」などなど

ギルバートのついでとはいえ、本人の知らぬ間にひそかに様々な注目をあびてているのだった。

強情な性格で誰かしらが捕らえても何をしてもいつの間にかギルバートの傍にいる。

生まれ、生い立ち、離れない理由、全て不明。

「拾い子と注目については新事実だがやつぱ不明だらけだな

「知つても意味がない情報ばかりではではないか！――

「わかるかぎりって最初に言つたじゃないか」

「そういう問題ではないっ！だいたい何だこここの文は！なぜあやつが注目など浴びねばならんのだつ！！最低魔法士でも見ていれば良からうがーつ！――

「いや、それを僕に言われても」

「ともかくあいつはほつといて作戦をたてるぞ」

「やうだね」

「うがーーっ！…しめてくるっ！…」

ガシャーーンッ！

パリンッ！

ぎゃーー！

お密様あーー！

「…………嫉妬は、怖いね」

「お前の記載のせいだろ。お前がこの店弁償しろよ」

「仕方ないなあ…………」

「リィちゃんとギル様にお会いになつたとは本当なのですか、『フロッグ』おばあまつー!?

「あらあらあ、ビューティフルが抜けてるわよ? いくら今の私の姿は十代後半とはいえ、一応あなたの叔母でもあるのだから少しくらいこなねえ…」

「わかりました、若かりし頃の『ビューティフルフロッグ』おばさま」

「…………何だかあの子にやつべつねえ…」

「リィちゃんとですのー? そんな、そんな、嬉しこじが…………やあへんつー!」

「褒めてないわよお?…………聞いてないわね」

「聞いておつますわー! だつてリィちゃんてばすつじくかわいいらしくんですのよー! それにすつじく天然で強くて凛々しくて素つ氣なくて冷めてて、でもかっこが堪らなく愛おしくて愛おしくてー!」

「……物好きよねえ。いつからそんな子になつたのかしらあ?」

「今、わたくしのよつな子供の田の前で男性を拘束してこのおばさまに言わせちやつたあー!」

「……だつてこの人つたらこの前、私になら襲われてもいい、って言ったのになんでか逃げ出そうとするんだもの。悪事を働く前に私を口説いてほしいわ……」

「それならば早く結婚なさればよろしいんじゃ『ございませんの？？』

「それが…………この人つたら照れ屋さんでえ！素敵に告白されるのはいつだつて女の子の夢でしじゅう！なのにいつまでたつてもプロポーズしてくれないのよ～……」

「毎回こんな状況にされるのに言えるか？！——それに照れてなどいないつ！」

「じゃあ今この場で言つて？」

「えつ」

「私のこと、本当に好きなら今この場でいつて……」

「…………あ…………の…………き、嫌い、ではない——むしろ、あ…………いや…………い、今、は……」

「…………早くプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズプロポーズあと少しで結婚結婚結婚けつこ」

ガシャンッ！ガチャガチャガキンッ！

「…拘束が増えましたわ。さて、おばさまが狂気にはいったことで
すしお邪魔虫は退散致しますわ！わたくしも早くリィちゃんたちを
追いかけなきやいけませんもの…！ではまた」」
…そう遠くない未来の私のおじさま？

「ま、待て、この危ない状況で、なぜ、」

「あらあ…話をそらすだけでなく私以外の女性を見るのねえ…？」

「待て！ルチアナ嬢っ！私を一人に」「ああ、きっとリィちゃん
は前回よりももつともつとより素敵な人になってるのね…早く会
いたいっ！…」

「大丈夫……すぐに私だけみえるようにしてあげるからあ…」

「誰かまともに話を聞けるものはいないのかあつ…？」

無情にも扉は静かに閉まつて行つた。

(2)・1 バーと館の騒がしい三人集（後書き）

『ピーフちゃん』がヤンデレなら、侯爵様はツンデレですね（笑）

(2)・2 蛙の子は蛙、ストーカーの姪はストーカー（前書き）

予定より投稿が遅くなってしまった（汗

(2)・2 蛙の子は蛙、ストーカーの姪はストーカー

「どうわけでリィちゃん達をばびゅんと追いかけて来たの〜！」

「……何がどういうわけなんですか？」

ビッグニース。

朝目覚めたら隣でルチアさんが添い寝してました。

昨夜、久しぶりに普通の宿屋で寝た師匠。

この前の『蛇と蛙の雷事件』（思い出したくもない！）で、無情にも夜の寒空のしたに気絶した私を置いていつたあの人に追いかいたのも昨夜。

私は未熟な自作の魔法具で室内に侵入すると、私の鞄から毛布を取り出して床に横になつた。

師匠の部屋は当然シングルなので私の入る布団などないし、部屋をとるにもお金があまりない私は自前で払わないといけない。そんなん無理だつ！と、叫べるほどに私には現在所持金が無さすぎる。さらにいえば師匠の布団に近づきすぎると、気配に気付いた師匠が雷撃つてくるから迂闊に近づけないので少し離れて固い床で眠ることにする。

ちなみに私の荷物は師匠のお友達という人から錢別でもらつた『厄よけのリング』をいつも入れてて、さらに師匠の道具が入つていてあの亞空間みたいな魔法具ほどではないが、またまた自作の魔法具の中に収納はかなり少ないけど私はいれている。だから私の荷物も無事だった。

…………そして朝田覚めると隣にお姫様みたいな金髪美少女がいました。

……私、この人苦手です。

「だあつてえ、リイちゃんの目撃情報とリイちゃんの匂いとリイちゃんの足跡とリイちゃんの行動予測に時間がかかっちゃって、追いついたのが夜になっちゃったの……」

ストーカー行為にしか聞こえませんよ～、変態お嬢さん。

「で、こつそり入つてみればリイちゃんが無防備にもかわいらしく寝ているんだもの！－チャンスと思つてつ

「何のチャンスですか！」

「こわつ！－私知らぬ間に襲われかけてたの！？」

「あ、大丈夫！－わたくしがやつたのは抱きしめてほっぺにチューだけだから。そのためにも途中でリイちゃんが起きないようこ嗅がせちゃつたあつ－ごめんねつ」

「悪くも思つてないのに謝るなあーつ！－どうりで私が気付かないわけだよつ！」

全然大丈夫じゃない！

私が気付く前に薬を嗅がせ、より深い眠りに入つた隙に寄り添つて寝る……。

その行動力に先日の人を思い出すな……。
でもさすがは蝶々。そのたんたん羽は伊達じゃない。
だけどそれでも犬、いや狼の私が背後をあかすなんて、私はまだまだ未熟すぎる……。

「それにしてもリィちゃん起きるのが早いのねえ。薬の量が少なかつたのかしらあ……？ああ、でも……無防備のリィちゃんも可愛かつたあ……。我慢するのが大変だつたわ……。普段は私に怒つてたり呆れてたり冷めてたりするのに、あ、そんないつものリィちゃんもわたくしは大好きよつ！で、そんなりィちゃんにわたくしが触つてもチューしてもあどけない寝顔でえ！……もう、たまらなかつたあつ……あつ、失礼、よだれが……」

誰かあ……この変態美少女お嬢様をなんとかしてえ……！
だが、早朝の部屋に未だに寝てる師匠を除いて、他の誰かがいるはずもない。

といつか師匠に助けを求めるなんて馬鹿以外の何者でもない。

「？リィちゃんど」「行くの？」

「…………寝直したら危険な田にあいそつですしき」といつてこんな朝早くにどこの店も開いてないと思うので、ちょっと歩いてこようと

誰かさんのおかげで頭も痛くなつてきたしね。

「えつ、つつつまり、これ、これって、データのお誘いつ！？も、もちろん私は今からでも全然OKのノープロブレムよつ……リイちゃんたら急なんだから、もう……！」

「だからどうしてやうなるんですかつーー？」

(2)・3 あなたがアタリなら世界の果てまで逃げてやる

結局ついてきちゃつてるし。

何でこの人といい『あの人』といい私にかまうの?

…そんなに嫌じやないのがちよつぴりくやしこど。

だつてしょうがないじやないですか。

師匠には悪友というか親友というか仕事仲間というか宿敵みたいな人が沢山いるみたいだけど、凡人に等しく世界を転々と旅する私に友達なんて出来るわけがないじやないです。

旅をしながら、出来た友達…。

嫌じや、ない。でもやつぱりこの人は苦手…。

今だつて幸せそつに腕に絡んでくるルチアさんは引き離せつとしてもガムみたいに離れない。

なんでそこまで引っ付くの?

今が朝で本当によかつた!

…昼間にこうして歩いたら、明らかに「アレ」な人に見えるだろうから。

というかルチアさんの目からぐるハートのオーラが痛い…。

そもそも散歩はこの人から離れるための口実だつたんだからこの人が着いて来たのじゃ意味がないじやないか。

早めに散歩を終わらせて早めに宿に戻つて休んじやおつ…。

…?ん?あれば、なんだらう?でも見た目から怪しそふんふんだから相手にしなくていいか。

「あ、リイちゃん! あんな所で福引やつてるわよ! しかもタダです

つて！」

えつーあからさまに怪しきのに何でつづりんで行くんですか？
あえて私も口にださなかつたのに。

普通朝っぱらから無料で福引はやらないし、体全体が黒マントで覆われている人なんて信用できるわけがない。
それに賞品の内容がどこにもないのも怪しい。
書かれてもいないし、ただそこには福引の看板とあのガラガラ回すやつと怪しい奴だけ。

しかもその黒ずくめの人は、早朝にたまたま散歩で通り掛かつてしかもやりたがつている獣人をガン無視でこつちつまり私達をじい…
つとガン見してたから誰が見たつて百分怪し過ぎる。
というかこつちみんなつ！

ほらーあからさまなスルーにその人怒つて帰つちやつたよー。
これで周囲には完璧に人はいなくなつたから、私はますます行きたくない。

私も無視したいよ？

…でもね、こちらには、空氣ヨメーツー、な暴走お嬢がいるんですよ

「お願いしまーす」

ほらやつぱりね、このありきたりちゅうちゅつ！
なんでやつかいごとをわざわざ作るんですかー！

「えつ……あ、はいっ」

意外にも彼（声的にそうだと思つ）が顔を隠していても面食らつて
いふことはさすがの私にもわかつた。

「……本当に来るとは……」

あなた自身もまさかその恰好で寄つて来るとはまつたく思つ
てなかつたんですね。

どうぞあなたの提案者を思つ存分、恨んで、そして感謝してください。

私はこの人を恨み、そして呆れますから。

私達が粗いとこりとこりながら怪しがMAXになつたのに、この人
は未だに現状に気付いてすらいない。

はつ！まさかこの人、本当はこの不審者の粗いの核をとつく
に見抜いて私を守つうと……。

「……これでアタリを引けばリィちゃんともつとらぶらぶになれる
はず……！……いや、それよりもアタリならあの『お邪魔虫』が抹殺
されるのだ思えば……でもこれでもしハズレを引けば『あれ』はこ
れからもリィちゃんに付き纏い続けてわたくし達の仲の邪魔をして
くる」とに……つーそんな、そんなおぞましいこと……」

おもいつきり私情が挟んでもました。

『お邪魔虫』とか『あれ』って、ルチアさんは師匠を尊敬してゐるはずだからありえないから…………もしかして『あの人』のこと?いや、でもルチアさんは会つたことがないはずだし……まさかね。

「蝶の虫人、ルチアーナ!狼の獣人、リイちゃんとの甘い毎日のためにこの愛の試練、乗り越えさせていただきますわっ!!」

一言余計です。

といふかタダなだけにただの福引ですから、当人を放つて主張変えないで。

「そ、そんな…………わたくしの愛が、負ける、なん、……て…………。
『アレ』も、生き続ける、なんて…………つ」

地面に向かつてうなだれるルチアさんの尋常じゃないほどこの落ち込みよう。

いつも哀れにさえみえる。
でも私はこれを慰めるつもりはないし、慰めたつて図に乗つていつ

そう絡んでくるだけだし。

といふかむしろこれでアタリだつたら私はそれを呪つてやる。
だつてアタルなんてことになつたら絶対に「わたくしとリィちゃん
は共にいる運命にあるのね！…」とか「あの『馬鹿』は…抹殺の運
命になる……これで邪魔ものはいないわ………」とか言つてかな
り鬱陶しことなるに決まつてゐるから。

結果だけいえばルチアさんは嬉しくも『ハズレ』を引いてくれた。
まあこいついうものつて滅多に当たらないんだし、回すときのワクワ
ク感が醍醐味なんだから、はずれてもそれだけで楽しめるというも
のだ。

「……………でも…でも、リィちゃんがアタリを引いてくれるはずだ
わ…！…やつすれば、やつすれば、きっと…！…！」

しつこいな…！…なんでそつなる…！

ポジティブすぎませんか…？

私がやつたつてラブラブなんかにならなし『あの人』もくたばつ
たりしませんから…！

とこづかやるつもりないし…！

「やりますから…私はやつと帰つて『飯食べて一度寝したい
んです…』

ルチアさんは置いていってしまおつ。
どうせ後で勝手にくつついてくるに決まつてゐる。

「……リ・イ・ちや～ん……」

「なんか急に背中がずごく重くなつた。

不審に思つて振り返つてみれば肩のところにルチアさんがへばりついてた。

邪魔だから落とそうとしたんだけど離れない離れないこと…。

ルチアさんは軽く宙に飛んでいるから肩に重定向的に乗つかつてくる。

「……」これは、これはとても大事なことなの……リ・イ・ちやあん……？

キモい！キモいよー……なんか首元ではあはあしてん……
ぎやあ！ペロッと舐められたあ……

な、なんで、どうして、そうまでして私にやらせたいの…？

……私は、弱いのだつつか？

何ことは言わない。

(2)・3 あなたがアタリなら世界の果てまで逃げてやる（後書き）

そういえば「変態」って辞書で引くと「やながから蝶になる」って意味でもあるらしいですね

(2)・4 私は花でもないし蜜なんて持つてませんよ

「一等～！一一人ペアでのラムズリル島一週間の旅～」

嘘つけ～！せつきルチアさんがだしたのと同じ色じゃないか！

「わやあ～やつぱりリィちゃんす～」いわ～！」

あなたものせられないの！

そしていい加減私からおつり～！

まったく、もう。

「…………」れ、あげます」

「えつ～～～？な、ななんでなんでなんで～？ラムズリル島よ？
魔法で南国で歴史溢れる夢の自由な国よ！？庶民には行くことは難
しいのになんで棒にふるの！？」

「だつて師匠は興味なさうだし、もつたいないから使つてあげて
ください」

チケットといひ紙切れ一枚とはいえ、使わないものを持つても
しかたないし、そんなにすごいのなら捨てるのも勿体ない。だか
らといって私は使わないけど。

「えつ！捨てちゃうんですか！？使つてくださいよーーー！」

やつぱり何か企んでいたか、ぐじ屋。さりげなく会話に混ざりてきたな。

あいにくだけど私は使いませんので無視無視。

「ルチアさん、受け取つてください。……私からの、あなたへの思いと一緒に……。それとも、貰つてくれないんですか……？」

：一応言つときますけど、演技です。
ある意味、嘘はついてません。

私の今の思ひは「こんな怪しいものは齧陶しいこの人に押し付けちゃうに限る」しかない。

そしてルチアさんはあつたりと個人的に気持ち悪い私の演技にはまつてくれた。

「そ、そんな……、わたくしの、わたくしの大馬鹿者おーーー！リィちゃんの想いに気付いてなかつたなんて！リィちゃんのそんな気遣いに気付いてなかつたなんて！わたくしはなんてばかなのーーー！このゴミ虫、バカ虫つーーーああ、それにしてもリィちゃんが可愛すぎますのーーー！」

……真っ正面からおもいつきり抱き着かれたけど、毎度のことな
でなれてしまつた自分がすぐ嫌あ。

でもいつもと違うのは、……よほど嬉しい言葉だったのか背中の羽
が忙しきほどに羽ばたいている。

いちいち引っ付かないでっ！！

本当ならそう言つてしまいたい。

……でも、つるさいけどさらなる厄介事回避のためにも、我慢しなけ
れば。

このチケットをえ受け取つてくれれば別にいいから。

「嬉しいーすゞく嬉しいー幸せなおー…だけじねえ、リイちゃん。
庶民には高級チケットだとしても、何回でも行ける無料バスを持つ
てるわたくしにはただの紙くずどうぜ」「暑苦しいので離れてくだ
さい」

やだやだあーー、と言つて離れないルチアさんを力ずくで強引に引
きはがすのには疲れた。

……この人が私の数少ない中の友達じゃなかつたらぶん殴つてるか
魔法具ぶつけてるところだ。

そうなのだった。この人かなりのセレブだった。なにせお嬢様だし。
こんな変わった人の家族つてどんな人なんだろうか。

「くすん……。そ、それには、チケットに書いてある日付なんだけ
どね……」

「日付？」

チケットをよくよく見てみればラムズリル島行きの船は今日から一週間後に出航らしい。

港は明日出発すれば着くくらいの距離。

「その日はちよつとまの婚約記念日でわたくしも強制的にパーティーに参加しなくちゃ行けないから、そのチケットは使えないの……」

ナイスッ！…おばさまっ！

叔母なのに結婚記念日でなくて婚約記念日という疑問がうかんだけど、まあいいか。

「ありがとうございます。使えないのは勿体ないですけど仕方ないです」

でもこれでルチアさんが数日中に離れてくれることがわかつただけでも良しとしよう。

「……だから、だから、嫌いにならないで……」

「…………はい？」

……なんでそうなるの？

ルチアさんがパーティーに行くのと私が嫌いになるの結び付きが
私にはわからない。

悲観的になることでもないような……。

「リイちゃんの役にたてなくてごめんね。でも、絶対参加だから……。
……。その、本当は、リイちゃんの役に立ちたいのよ……？ 使ってあげ
たいんだけど……。」

……なるほど。つまりルチアさんは、

リイちゃんはチケットを消費したい ルチアさんに頼もう でも無
理だった この女は使えない 役立たず＝嫌われる＝自分から離れ
てくる。

……たぶんこういう推理であつているとは思う。

あー…………、…………こういう場合はどう反応すればいいんですか？
友達なんて少ないし、ルチアさん見たいな人はどう対処すれば良い
のかわかんない。

ルチアさんはいつも本音モロだから、思つたことを正直に話せ
ばいいんだろうか。

「…………嫌いになれるわけがないじゃないですか」

「え…………ほ、本当…………こ…………？」

ルチアさんが珍しく私の顔色を窺つていい。
それほどまでに私に嫌われるのが恐ろしいのだろうか。

お嬢さまなんだからお友達なんて沢山いるのだしつこ、なぜ私に？

「私には今まで友達がいなかつたから、この気持ちをどう言えればいいのかよくわからないんですけど……」

ルチアさんはかなり奇天烈で変わり者でちょっと不審人物だけど、それでも女の子なのには変わりはない。慰め方がよくわからないから、とりあえず私の思つてこることを正直に言つてあげるとしよう。

「ルチアさんは私の大事なお友達であり、……応は……大切な人なんですから」

(2)・5 晴れのち雷、雷のち……重石

「ふんふつふふ～ん えつへへ～～……リ・イ・ちやああん 」

ルチアさんは私の心からの一言を伝えると同時に再びタックルもどきのハグと、嬉しいのか何かが恐ろしいのか何だかよくわからない発狂をしてきた。

そして今ではこのとおり。

突き放すのもなんだし、とりあえず腕組みだけは許している状態。

ただし、恋人繋ぎだけは断固反対させていただきました。

「…結局、チケットはどうしよう」

滅多に行けないのに捨てるのはあまりに勿体ない氣もするんだけど

…。

「それなんだけど……一応ギル様に聞くだけ聞いてみたらどうかしら。絶対拒否の可能性もないかもしれないし……」

……頭つから否定しないほうがいい、か。

確かに師匠に聞くだけ聞いてみればいいか。
処理はそのあとで考えよう。

………… セトヒ、

「手をなめたりお尻触つたりしたら本気で殴りますよ」

怪しい動きをし始めたルチアさんは涙目になりながら私の腕から離れていった。

触れないなら離れていた方がまだまし、ということだらうか。

どんだけ私に触りたいんですか貴女は。

驚いたことが起こった。

驚きすぎて私は数十秒固まりましたとも。

といふか何が起こったのかすぐにはわからなかつたのだ。

「…………」

話すよりも先に見せた方が早いと思つてラムズリル島行きのチケットを師匠に向けたら、師匠はチケットの文に目を走らせるどく自然にかなりスムーズに流れるように「…………」私からチケットを持つて行った。

「…………え？…………あ…………あ…………れ？師匠、どゆこと？

師匠は絶対に受け取らないと思つてた。百パーセント無視すると思つてたのに。

手にしたつてことは…………それを望んでる？欲しいんですか、それが？行きたいんですけど、ラムズリル島に？
師匠の場合、お金に困つてないから楽に行けるはずなのに私からチケットを盗つたつてことは…………。

「…………そこまでがめつになんて…………」

ビシャーナンツ

「…………」

「…………」

ががが顔面が、顔面があーーっ！！

聞かれてはいけないとこだけ声に出でしまつたあつーー！
あまりの痛さに声がでないまま部屋を超スピードで“じるじる”縦横無
人に転がる私をうざく感じたのか、師匠は私をボールの“ごとく”足蹴
にして押さえ付けた上にさらに魔法具で重しを乗せてきた。
大きく真っ黒で明らかに頑丈そうな石のせいでも背中は痛いし、顔は
痛いし、痛みで暴れることも出来やしない！

「ふげえつ！」

それだけじゃまだ足りないのかさりに師匠はその上に座るところ
S魔による大胆鬼畜で悪質な罰を！！

他の人が見たらどう説明するつもりなんですかあつーー歩間違えれ
ば殺人未遂ですよっ！？

痛い上にもがくこともできないこの苦しみを師匠に分けてあげたい。
でも今の私にはそう思うことすら煩わしい。
何てつたつて顔面に雷を直でくらつたから。

…………でも、何故か師匠はいつも本気でやらないな。
今だつてかなり熱くて痛いけど痕に残るほどじゃない。…………しばら
くやけど状態だけど。

「まあ、大変！リイちゃんつーー！」

この人はこの人で心配してくれているのかと思えば、ビサバセに紛
れて私の耳や髪にチューしてくるし…。
だあーーっ！！もうっ！！
全てに置いて鬱陶しい人だ！！

「……………」
は…………大丈夫、…………」

「……………」
「……………」

意味がわからないし答えになつていしそもそも海は群れなんて作ら
ないし言葉になつてないし。

でも、答えてくれたのには少なからず驚きだ。

「むれ…………群れ？ギル様、それって先日イワシの方々によつて行わ
れたお祭りの、あの事故のことですの？」

「……………」

相変わらず師匠は全く喋らないし顔も変わらないけど、長年一緒に
いる私にはそれが肯定による沈黙だということはすぐにわかつた。
そして場の空氣的にルチアさんもそれに気付いたんだと思う。
イワシのお祭り、というんだから、たぶんそのイワシは魚人のこと
なんだろうけど…。

珍しく私の質問に答えてくれた師匠だけど、さらに聞いてもどうせ無視か要領を得ない答えが飛んでくるに決まってるからルチアさんに聞いてみるとするか。

でもその前に、質問に答えず話の途中なのに石の上で本を読み上げたフリーダムな男と、心配顔をしながらまたしても人の尻尾にほお擦りをする天然無自覚腹黒な少女の、一人を何とかしなければならないというくたびれるような作業が私には残っていた。
もちろんその片方には今度こそ体罰を加えさせてもらうとする。

(2)・6 男たちのひんやり暴君としてお祭り事件

「…………本当に本当に本当になんであなたは私にしつづけられたがるんですか」

「…………なんとか重石地獄から抜けられた私はすぐさま彼女をお説教師匠に言つたら後が恐ろしいしねっ！」

「……どんなに私が怒つても殴つても怒鳴つても、この人は毎回毎回同じことを繰り返す。

女の子同士なのに色々なところ触つて何が楽しいんだ？！？」

「ううう…………。だつてだつて！いつもいつも一応は触らなこように自制はしますのよ！？でも…………リイちゃんのところけるような声にちょっとひり冷めたその目つき。身体がぞくぞくしそぎておかしくなりそりでえ…………！絹みたいな髪やふさふさの尻尾、…………わたくしを狂わすよつな匂いに柔らかく甘い肌と唇…………何よりもわたくしへの素敵な愛のお言葉イタアイツ…………」

「あたかも私とキスしたみたいに言つたなそして愛の言葉など発したことなどないし断じてありえない」

それから嬉しそうに痛がるな。
だんだん苛々してきた。こつものことだけど。

「ついわやさんがわたしへここんだまどしたのよ……」

「そんな記憶はない」にもなつて、さうでもここからわかれと私の質
間に答えてつ……」

「くすん……。イワシのお祭りとこつのは変化タイプのオヌのイワ
シによる大規模な……暑苦しい？お祭りですの。内容は興味ない
ので詳しくないのだけれど……ひたすら同じ所を暑苦しくぐるぐる
回るだけの意味がわからないお祭りみたいで……。彼らにこもやの行事
の意味が理解できないみたいなのだけれど……」

じゃあ何のためにやるのだらつか？

「それで事件なんですが……回るところでもそんなにすげいほど
ではなく、一分でよつやく一周とこつぼどの遅さと範囲なので渦が
出来ないから漁師達も困らなかつたんだけど……」

「今日は違つたと？」

事故があつたって言つてたしね。

「…イワシの一匹が田ざとく魚人ではなくただの違う種類だけですごく美人な魚を見つけてしまって、…男達が取り合いになるわ、興奮して祭は最高潮になりすぎるは、イワシを食べに来た大きな魚達が右往左往するは…止められる魚や人はいなかつたの」

…その光景なんだかすごく見たくないなあ。
しかも争う理由がすごくどうでもいい。

「その結果海に渦が出来てしまつたみたいで…。それが今も続いて船を出すのは危険だし、安全地帯では漁の真っ最中だしで今は一日に数回しか船は出してないらしく…」

「どこまでも熱くなる単純なイワシの魚人だこと。
そんなことで被害被る我々はどうなるんですか。」

「といふか当の本人、いや、本魚は一体何してんですか！？」

「えつ？ だつて何の変哲もないただの魚ですよ、リイナちゃん？ しかも一匹だけで放浪してんの。食べられちやつてること決まつてるじやない」

- 1 -

だめだめだめだめだめ！今のはーしー！
さつきまでしてた会話は全部なーしつ！

そんなくだらない話は聞かなかつたことにする！

「……と・に・か・く! 師匠はその島に行きたかつたんですね?」

卷之三

はい無視。まあ想定済みだけど。

でも、師匠が行くところはまつまつ私もそれに行くところとなる。

一人組だから私もきつと乗れるはず！

「…………う、うう～…………す、ずるうーーい！－わたくしも行きたーい！－リイちゃんとギル様と一緒にエングジョイしたーい！－リイちゃん

と一緒にフランで寝泊まつしたーーー。」

やつたつーーーの調子だとすぐこでもお別れできそうだーーー。
後で旅仕度……といつても私の荷物は魔法具の中だからすむことは
ないか。

「…………お前を連れてこへ予定など、ない

……私は少し前から黙つたままなんですが、どうやら師匠は私の心が読めるみたいだ。
いこじらないですか、どうせ一枚で一人組なんだし。

「いいもんいいもんー勝手につこへからー

「……行けないんじゃなかつたんですか?」

「ふふ……リイちゃん、わたくしのねまつりをなめちゃいけないわーそしてわたくし自身を舐めてもいいのよー。」

誇れるといひじゃないです、そこ。

そして「どうしてこうしたことを平氣で語れるんだらう?

とにかく、私たちは明日にでも出発することになった。

：でもあくまでもこれは私の予定。

師匠はもしかしたら今日私を置いて出発するかも知れない。

多分今予定を聞いても無視されるのがオチだろうし。

だとすれば私は何がなんでも出航日までには追い付かなくてはならない。

：まあルチアさんはお別れだし、それくらいの苦難は別にいつか友達なのに悲しみの別れが生まれないなんて何てことだらうか。

「あの……いつもの、」褒美、い、い、い……？」

……言い忘れてましたけど、ルチアさんは働かせるにはとっても有可能な人。

その一、貴族だからお偉い人達の裏情報にはとっても詳しい。貴族

を懲らしめるとかに有益な情報を『』えてくれる。

その一、お金持ちだからたまに色々な経費を持つてくれる。更には、お金持ちの美少女だから相手側から勝手に安くしてくれることもある。

その二、なぜか私に従順なこと。そのため、私がたつた一言優しく（たまにわざと甘えて）お願いするだけでかなり張り切つて働いてくれるから安上がり。

その四、結構ありえないくらいの体力がある。だつて馬に乗つても往復で五日はかかる距離をたつた一日で帰つてくるのは明らかにおかしいだろう。一度聞いてみたら「愛の力と親戚による特訓のおかげですわあっ！」と返された。……親戚？……特訓？……愛の力もそうだけどこの人の言つてる意味がよくわからない。

その五、彼女は虫人の蝶。つまり、体重が軽いどころかほぼ無音で飛べるため、高いところの持ち運びや隠密にかなり便利。

——以上のことから私にとつてルチアさんは役立つどころか、かなりお世話になつてゐる。
だから、毎回お礼をしてるんだけど……。

「……本当に、これが、友達にする、一般的な、お礼の仕方なんですか……？」

「うん！リイちゃんは世間知らずだけど、これは常識のことですの！あ、ただし近しい人にだけに一年上の人や年下の人には絶対に絶対に絶対にダメっ！！」

うわっ！…何もそこまで強く言わなくてもわかつてますから。ただ、……こんなことをする人を私は一度も見たことがないんですけど？

頼み事をするのはたいていルチアさんだし、他の友達はみんな一つか二つ歳が違うし。

私が人間関係に疎いからって自分の都合のいいように騙してるだけなんじゃ…。

でもそれは私の友達がかなり少ないから見ないだけで、街中でも私が見逃してるだけなのだろうか…？

本当はみんなやってること？

「さあー早く早く早く早く早くはやー「わかりましたから少し黙れ」」

そして私はルチアさんの頬に自分の唇を軽くつけたあとに一言。

「ありがとうございます」

今度は本当に心をこめて言ひてあげた。

…そして、ルチアさんは本氣で鼻血をだして倒れました。
まあこいつものことだけど。

…と、思つていたら、いきなり飛び付いてきた。

不覚つ！ルチアさん相手に油断しそぎた！

とつさの行動が出来ず、私にしては不覚だった。

さらには私の胸やお腹に飛び付いてきて自分の綺麗な顔をすりすりときたもんだ。

このままだと鼻血の後が服に染み付く……もう、遅いかもしだい…。

「それはなしつ……」

でも私としては身体を引き離すだけだった。

なのに、びっくりしたのと焦つたのとでうつかりルチアさんのお腹に膝蹴りしてしまった。

ドフッ、と低く硬い音がする。

ルチアさんがかなり頑丈だとしても、さすがに今のはまずかつただろう。

かなりの罪悪感が私の中におった

「嫌だ」とはいえ友達にしかも躊躇はいけない

私は急いで声も無しはぐれたりと地面に崩れ落ちた川チワさんを介抱しようとしたんだけど…

腹蹴られたのに何で喜んでんの、この人。

しかもなんか達成感と欲望が混じつたよつた喜びよつだ。
とにかく、不気味な笑い。

そしてルチアさんは今度こそ本当に氣絶した。
鼻血の後さえなれば、はかなくて綺麗な美少女なのにかなりもつ
たいない。

(2)・6 男たちのひんやり暑苦しきお祭り事件（後書き）

ルチアさんの最後の怪しい行動の理由は次回に。

(2) フリーブ・アート・アート（前書き）

リィブ視点ではないです。

(2)・「理不尽ファイティング

「リィちゃんたらあ……。冷たいところもすこく素敵っ！」

恋は盲目。というかルチアーナからしたら彼女がつくる顔動く姿とにかく全てが好きに繋がる。

「でもわたくしを置いてまた一人で行っちゃうなんて……早く家に帰つてお一人に合流作戦をたてませんとっ！」

はい、彼女の中には諦めてなんかこれっぽっちもありません。憧れのギルバートと愛しいリィブに近づくためにほどんなことだつてします。

たとえ、お金がかかるうと遠出だらうと力仕事だらうと雑用だらうと、一人に少しでも好かれるのなら、なんでも。それだけ、彼女にとつては一人に嫌われるのがすこく怖い。……ただ、普段の行いのせいでそこまで好かれていないことに本人は全く自覚していませんが。

「……でもその前にアレ（・・）に一言言わないと気が済みませんわ……」

名前を口に出すのがおぞましいようです。

言い忘れてましたが彼女は今、リィブ達がいた町の外に向かつて歩いていた。

急がないといけないはずなのになぜ走らないかといつと……。

「…………みたぞ…………！」

突如空から下降してきた、首に朱色の首輪をつけるこの黒髪美少年、いや彼女にとつて最大の宿敵に一言物申すため。

はた目からは美少女の前に天使の如く舞い降りて来た美少年、もしくは美しい恋人同士の逢瀬にしか見えないことだろう。

だが、二人は恋人同士ではなく…………『変態同士』であつた。

「……また、あなたなの？しかも鳥の分際で卑しいだけでなく、こつそりのぞき見だなんて…………どこまで私とリィちゃんの邪魔をすれば気が済むのかしら…………リィちゃんの近くにいるというだけでも許せないといつのにつ……」

「黙れ白々しいつ！それはこちらの台詞だ！いつもどこでもどんなときでもあいつと俺の邪魔ばかりしあつてつ……しかもなぜ俺よりも先にお前があいつのところにいるんだ……！」

「…………あつて、一緒に夜を明かしたんだから…………いるのは当然でしじゅう？寝起きのリィちゃんも最高だつたわあ……あの無防備な眠

「顔に昨日の一時！もう一生忘れられないわあ……！」
氣眼。少し乱した……いや、少し乱れた服。そしてあの可愛らしい寝

卷之二

目は怪しいながらも、あえてそういう怪しい言い方をしたルチアーナ。

あえて、寝ていたリィブに薬を嗅がせたことば隠しています。

リイブの寝起きをみたことがないらしい鳥の『変化タイプ』の少年、
タイシユー・タイラシユビルツはあきらかな嫉妬と憎悪の日を彼女
に向けるが、もちろんルチアーナは知らんぷり。

「そ・れ・に、その言葉そつくりそのままお返しするわ。リイちゃんといちやいちゃし始めた途端に、こつもこつもこつもこつもこつも邪魔ばっかり……！」

「貴様に言われたくないわつ！先程も俺があいつを遠目に眺めよう
と飛んでいればこれみよがしにあいつに……！……！」

つまつのもぞくです。

あわよくばリイブの着替えさえも見ようと近づいてました。

そしてルチアナは、鳥に変化し狼であるリィブにばれない程度の距離間でこつそりみていたタイシユを虫人にしてはあり得ない視力で捕らえたので、あえて彼女に抱き着きました。

です。

タイシユに嫌がらせができてリイブに抱き着けたが、かわりに彼女に膝蹴りされる。それはまさに天国と地獄。いや、彼女にとつては天国と天国のことだった。

「それっていつの『』とかしら？・わたくし達、しそつちゅう抱き合つてるからわかりません ああ…それにしてもさつき臭いだい匂いが離れなくて、もう、もうう～…つ…」

「最初から最後まで引っくるめて全部だ…！あと『達』ではない！あいつをいれるな！一方的に貴様から迫つてゐではないか…！」

「あらあ、怒つてるの？当然ねえ、わたくしとリイちゃんは何たつて『女同士！』なんだから、いぢやいぢやし放題だもの。でも、男のあなたがいきなり抱き着いたりしたらしくらリイちゃんでも怒るんじやないかしらあ。もしかしたら嫌われちゃうかも？お氣の毒う

ー

「ふんつー貴様こそわかつておるのか？あいつが貴様といるのはあくまでも『お友達！』だからだ。友人のいないあいつにはどこまでが境界線なのかわからぬようだが、いくらあいつでもその『お友達』を越えるような行為は認めぬだろうなあ。それにくらべて俺は男だから心さえ奪つてしまえばそれ以上の行為を許されるのだ。惨めな姿になつた貴様が目に浮かぶわつ！」

「ふんつーでもお……あなたがリイちゃんを好きで出来る口なんて来なさそつだから安心だわあ！」

「負け惜しみも弱くなつたな。先ほども言つたとおり俺は落とせば

よいだけなのだつ！貴様など確率ゼロではないか！これほど愉快で滑稽なことはないわ！」

口・イ・ツ……ツ！

火花がちるとはまさにこのこと。

二人とも美少年、美少女の顔が激しく歪んであります。しかしそんなことは一人にはライブの前でないでお構いなしです。

それから両者、しばし無言で睨み合つ。しばしといつても、5分ほど。

そして先に口を開いたのはライブいわく、「ガムみたいにひがくべつとりくつつき厄介でいらっしゃめんどくさい、私のたぶん大切な友達」の方。

「行けないつ！こんなおぞましい変態真っ黒鳥男に構つてられないわ！急がないとつ……！」

「変態がいえることか！それに俺は変態ではない！ただ愛情が過剰過ぎてるだけで変なことは何一つしてないわつ！」

ルチアーナもしがだが、タイラ・シユビルツも自覚してるけど自覚してないところがかなりある。

リィブいわく、「偉そんで人の話を聞かず周囲を考えない、猪突猛進の騒がしい告白男」はえられないことを偉そとに叫ぶと、さらに偉そうな顔をした。

「ところで本当に急がなくてもいいのか？お前のことだ、どうせ遅れても遅刻理由を正直に話すのだろう。『主賓の姪が変態の如く相手に、それも同性にしつこく付き纏つた結果、遅刻という失態』……いざなれば、謹慎でしばらく自由には動けまい。当然あやつに会うことも叶わぬなあ……。さあ！思つ存分遅刻するがいいわっ！」

「くつ、うう……あ、あなたはどうですの……私よりも下の伯爵のくせに参加しないつもりなのかしら……？」

「侯爵はお前のおばの婚約者が手にした爵位だうこ、何を偉そうにしてる。…………くつくつくつ！自分勝手に動き回った貴様と違つて、俺は激しい頭痛のための療養ということで、招待状が届く数日前からすでにその日には予定が入つてあるのだ！つまり自由に動ける……わあ、羨むがいい！悔しむがいい！」

「か、鳥のくせに……！……汚らしい……そしてなんて小賢しい……」

鳥だから、と差別されるのが大嫌いなタイラ・シユビルシもこの時ばかりは上機嫌でルチアーナを見下した。

その表情にムカツ腹がたつルチアーナ。たとえ彼女が誰かに彼のことを悪く告げ口して来させようとしても、自分のよつな特別な身体能力を持たない彼ではどのみち時間内に会場に着くことなど到底無

理なこと。

そして彼の言つどおりでもあり、これから先リライブに会つためには
ここで失敗してはかなりまずいことになる。

「貴様はせいぜいパーティーを楽しむがいい。ついでに新たな出会い
でも見つけてこい。そして一度と戻つてくるなつ！」

いつか千倍返し + 半殺しを決意し、不敵な笑みで見送るタイラシユ
ビルツを尻目にルチアーナは風よりも早くその場を走り去った

(2)・ア理不尽ファイティング（後書き）

ちなみにルチアがカラスをタイシューだと見抜けたのは首輪のおかげです。

次回はちょっと投稿が遅くなってしまいますので…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040p/>

師匠とわたし

2011年8月6日18時24分発行